

第 1615 回 (7 月 13 日)

中山間地帯農業の構造と課題

(高崎経済大学) 小田切 徳 美

今日、いわゆる「中山間地帯」に関する関心が各方面から高まっている。それは、日本農業を覆う「担い手不足」の典型地域としてこの地帯が位置づけられるからである。したがって、その現状（農業構造）把握と地域農業再編方策の実証的な検討は、日本農業総体の展望に関しても重要な課題を示唆するものと思われる。

しかし、この中山間地帯を対象とした農業構造の実態解明は、必ずしも研究蓄積が厚い領域とは言えない。この地域を対象とした 80 年代後半以降の学界の諸論議は、主として「むらづくり・むらおこし」論（地域活性化論）や実態把握不在の政策論への傾斜が強かったといえる。したがって、当面する中山間地帯農業問題研究の課題は、現下における農業構造の実態と動態メカニズムを正しく把握し、それから展望される中山間地帯農業政策のあり方を論じるという基礎的作業から着手する必要がある。本報告もそのような作業の一環として試みたものである。

報告の構成は、①統計分析による中山間地帯農業の概況把握、②統計分析及び農家調査による土地利用を中心とした変動メカニズムの実態的解明、③これらによる中山間地帯の農業構造の性格の総括、④さらに以上から導かれる中山間地帯農業・農村の維持・再建へ向けた政策課題の析出である。

全体の考察の前提となる①では、特に中山間地帯においては、その農業構造の態様に著しい多様性（人口・労働力構成と地目構成の両面からの多様性）を指摘した。一般的に理解されている「担い手」の全般的な脆弱化が中山間地帯農業の基本的特徴であるが、同時にその地域的多様性・個性の存在も、もう一つの大きな特徴であった。

そのような地域的多様性の中でも特に、高齢化が著しくかつ地目構成においては水田が卓越する地域の典型としての中国山地を対象とした分析と総括を②と③で行った。

そして、それから導かれる農業の担い手確保・育成にかかわる政策課題や検討すべき論点について、④で次の 3 点を指摘した。

第 1 は、短期的には、脆弱化しつつもギリギリのところで、地域農業を面的に担っている高齢農家を、当面する地域農業の「担い手」として積極的に位置づける「高齢農業振興」が課題となる。

第 2 に、中・長期的課題として、不可逆的に脆弱化せざるを得ないこれらの高齢農家を補完・代替する「担い手」像に関する検討が求められる。「農業公社」や「農協主導・直営的農業法人」等の「危機対応的法人化」の試みがそれである。ただしこれらに関しては家族経営や農協との関係の整序が実践レベルにおいても模索されている段階であり、今後の課題が残されている。

第 3 に、これらの担い手を重層的に捉え、また「棲み分け」を行う地域農業マネジメント・システムの構築が要請されている。そのための地域農業マネージャーの確保・育成とそれを支援すべき自治体農政のあり方が早急に検討されるべきであろう。